

潮流

金融のグローバル化と地域通貨

最近、『スモール・イズ・ビューティフル』の著者シューマッハの衣鉢を継ぐというJ・ロバートソン氏の講演を聞く機会があった。主題は、土地、水等の「共通資源」の価値をより公平に分かち合い、人々がその生活について一層自主性を発揮できるようにするにはどうしたらよいかというものであった。穏やかな語り口ではあったが、そこには地球的共有物の利用に応じて支払う地球税と新たなグローバル通貨の導入に関する考えが論理的に展開されていた。実体経済と大きく離れて増大し続けるグローバルマネーに関して、著名な経済学者たちによって為替行為を対象とする課税の提案が行なわれていることの説明や、情報技術革命に伴ってますます拡大する金融のグローバリゼーションの対極に発生している地域通貨に関して、さまざまな貨幣は併存できるものであるとする主張は、十分に知的な刺激を与えるものであった。

氏の貨幣に対する考え方は、ユーロ体制への加入をめぐる議論が高まっている母国イギリスの状況を反映しているのかもしれない。現在、世界の1500を超える地域で、特定の地域内で循環する地域通貨の運動が展開中だといわれるが、こうした実践は、ケインズがあの『雇用・利子および貨幣の一般理論』のなかで、かなりの紙幅を割いて紹介したシルヴィオ・ゲゼルの「スタンプ付き」貨幣の提言を想起させるもので、それが終に実現の時を迎えたのであろうかという感慨にとらわれたのであった。

ところで、国を越えて飛躍的に拡大する金融のグローバル化と、それに対応する地域通貨の運動については、数多くの論考がすでに試みられている。とくに貨幣の発行が近代国家の最も専管的事項であることに着目して、このような逆方向をさす二つの新しい展開が見られることは、近代国家が直面する歴史的な国際経済状況の象徴とも受け止められるし、新しい世紀の潮流を示唆するものとも考えられる。

思えば、地域主義の思潮に誘われて、地域的な「かね」の循環を構築することはできないものだろうかと思いをめぐらせたことがあった。そして「かね」こそ最も流動的なものなのだから、それは一番難しいことなのだと結論を出していたのだった。世紀の変わり目にわたって、貨幣に封じ込められた交換の媒体や価値の尺度などのさまざまな機能が解き放たれて、わが国でもボランティアの代償としての地域通貨などのかたちで様々な新しいマネーが生まれてきている。あの時は不可能だと思っていたことが、いろいろな形で実現されていくのを見ると、新しい世紀には、既存の思考の枠組みに縛られずに、もっと自由な発想を心がけねばならないと思うのである。

(理事長 浜口 義曠)